

R. Jackendoff の意味論

— notes on semantics (2) —

公 平 珠 躬

0. 前回 (Litteratura 10) において、私は意味論の接近方法として logical な立場に一番居心地のよさを感じることを告白(?)して、Montague 意味論を取り上げました。別に謙遜しているわけではなくて、私の観点 (大げさに言って、世界観) に従えば、ある特定の観点 (哲学) のみが正しいという信念ある立場を決してとれないのです。これは、独創性のない (凡人である) 証拠とみなされて結構なのですが、scepticism を the most fundamental principle とする哲学は必ずしも小人に限られてはいないと開き直ってもよいとは、密かには思っているのです。

Montague 以前の標準的 (1 階の) 述語論理の明快さで処理できる日常言語の (特に) 意味論的処理の分野は非常に限定されていることは確かです。論理 (形式) 主義者たちによる修正や、拡張理論にも興味をそそられ、知的快感を与えてくれる仮設も多数提出されています。Montague およびその流れを汲む学究の論議もむろんこの範疇に属すべきものです。しかし、今回は彼らとは (かなり) 離れた立場にあると思われる優れた意味論的研究の一つを見てもよいと思います。Ray Jackendoff の意味論的考察です。むろん、私の根本的立場の論理主義を棄てるわけではありません。むしろ、ここに親密性と豊かな応用可能性を見いだせると思うからです。(Jackendoff 自身は、たとえば (1987 a) において、Lewis に代表される哲学的意味論批判をおこなっています。しかし、(1983) での意味論に対する重大な制約の一つとして、構造の意味 [のその部分構造へ] の分解可

能性を強調して、Montague 文法に組みする主張もしています。)

論理派 (e. g. GPSG の主張者) に見られる、(人間の) 心理的实在性との係わりの否定 (ないしは無知) の主張を捨てなくても、例えば、Frege に対する Russell のように心理的側面を十分認識して、意識的に論理的面の強調も可能でしょうし、心理学的認識そのものが究極では、エレガンスと簡潔性の美学的基準に従って提唱されていると見たい、と言えるのではと私には思えるのです。究極における、言語使用の心理的側面の重要性は絶対に否定できないことは十分認識しているつもりですが、そこでの成果の完全なる实在性の主張が行えるほど、強引な見解は持てないと言いたいのに過ぎません。

あるいは、Jackendoff が主張するように、認知心理学 (その中に彼のいう認知意味論も含まれる訳です) が、実世界と人間の創り出した投射世界 (the projected world) との相互関係の探索に関わるものと定めても、その関係規則自体は、美的 (主観的) 用語で表現せざるをえない、と言い換えてもよいかも知れません。

1. 1 R. Jackendoff は Chomsky 言語学の流れをくむ学究であることは自他ともに認めるところでしょうが、(Ph. D. 論文ですでに意味論の研究の成果の発表をして以来) 彼の研究は自然言語から出発して、大きく言って認知心理学 (cognitive psychology), さらに認識論 (epistemology) 一般にまで及ぶ分野にまで分け入ろうとするものだけに、その与えてくれる知的快感は大変大きいものに感じます。彼の英文は、師匠のような圧縮された緊張した文体というより、実例豊かな明快な理解し易いものだと言えると思います。以下、彼の 1980 年代後の意味論的考察の代表的文献として、(最後に記載の references 中の論文を含め) とりわけ Jackendoff (1983), (1987 a, b), および最新の (1990) を中心に取ったノートから、私にとって興味深い主張の一部を取り上げ、考察してみようと思

ます。

1. 2 当然のこと（むしろ望ましいこと）ながら、彼の最初（1972）の標準理論と対応した意味論から始まった70年代の意味論へのアプローチと（むろん、そこですら Katz-Fodor や Katz-Postal との異なる立場を鮮明にしていますが）、ここで取り上げる（1980年代の）ものとはかなり異なる場合もあります。一例として、単語（あるいは lexemes）の意味の primitives への完全分解可能性の仮定は、当時の論理学的意味論あるいは Katz や Generative semanticists に影響されてか、彼も受け入れていたようですが、80年代は必ずしも（少なくとも必要十分条件としては）認めていないと思われる箇所も見つかります。

むろん、彼の意味論的研究は、終始継続し発展していますから、（1972）以来（1976）でも実質的研究の中で、先駆的主張が見いだせます。（例えば、（1976）では最初に、GO, BE, STAY, CAUSE, LET を動詞の 5 semantic primitives として postulate して、広範囲な動詞の意味論を展開して見せています）

1. 3 Chomsky 流の GB 理論においては、logical form と称するものが意味論役割を果たすわけですが、これは昔の表層構造的な S-structure より出力されると考えられ、例えば、量子子を含む文（e. g. “Everyone loves his country.”）において、全称記号の曖昧性が記号論理学と同様に指摘されます。（his が各人を指す場合と、特定の「彼」を指す場合）しかし、こういう論理的意味の説明では以前のように深層構造（新しく D-structure と呼ばれるものですが）で行われても、S-structure 上での説明としても実質的差異はないと思われますし、この新しい説明は表層的説明に終始する Montague 流に近づいたとも言えると思います。

実際、（1987）の冒頭で彼身述べているように、彼の想定している統語論が GB 理論に最も近いものであっても、彼の意味論的議論の結論は現代の他の活動中の統語論にも等しく適用可能な場合が多いと思われます。ただ

し、Jackendoff の目指している意味論的説明の重点は、(少なくとも、今世紀初頭以来の) 論理的処理では取り扱え兼ねた日常言語表現の意味解釈に向けられているが故に、大いなる興味がそそられると言えます。

2. 1 Jackendoff の意味論は、基本的に生成統語論 (generative syntax) と適合する (compatible) ものであることを目指していると、冒頭に宣言しています。Chomsky (1957) の最後に述べられている「統語論的構造と意味 (構造) との間に予見される多くの重要な相関関係の発見」を進めて行きたいと言うのです。ここには二つの基礎的問題にぶつかります。意味の問題と (統語論と意味論の) 相関関係の問題です。第一の意味の問題は、それが説明すべき言語現象を明確にし、意味についての直感を形式的に処理することを目指すべきです。それによって、言語使用者が (共通に) 持っている種々の表現の持っている意味の区別を明らかにし、種々の語 (句) ・文などの間に話手が持ちうる推論を説明可能にしてくれなくてはなりません。この基礎に立って、話者は語 (句) ・文を非言語的世界の理解に関係づけ、論理的判断や指示物の理解が可能になるのです。

2. 2 第二の統語論と意味論の相関の問題は、統語論・意味論両者の構造の形式的処理の間関係を明確にすることを目指しています。両者がまったく独立しているとは思えません。完全ではないがなんらかの (いや、密接な) 関係があると思いたいのです。上の意味の問題への解答は、この相関関係をより明確にしてくれるものほど高く評価したいのです。無論、この相関関係のみを求めて、意味の問題の理論を組み立てるのは危険であることは認識している筈です。(この点、先の Montague の意味論ではこの危険性がより大きいと言われるかも知れません。) とにかく、相関関係の可能な限りの追求は、単純性に美的エレガンスを感じると言いたい私の在来からの主張に合致します。(通常、統語論と意味論の項 (arguments) の相関関係は “linking theory” と呼ばれます)

ただ、(拡大)標準理論と重要な相違は、前者が Chomsky (1957) 以来の統語論を中心に据えて、音韻論と意味論を解釈的規則で導き出そうとしている、換言すれば、統語論で形成規則 (formation rules) を導入し、意味は解釈規則で導き出そうとしているのに対して (たとえそれが、Chomsky の拡大標準のように、意味との関わりは、D-structure から S-structure を経て、Logical Form として表示されたものであったとしても)、Jackendoff の称する意味論 (概念構造) は、独立した形成規則を持っていることを主張して、(多分生来的な) 概念構造形成規則を提案していることは重要なことと言えるでしょう。意味の基本概念を、統語論と平行して、書換規則で導入しようとしています。

例 PLACE → [_{place} PLACE-FUNCTION (THING)] : 基本概念 PLACE は PLACE 関数と THING の範疇の項よりなっている

この種の基本概念範疇は、彼の言葉を借りれば、「意味論的品詞 (“semantic parts of speech”)」と称せられてよいでしょう。その主なものは、上記の PLACE の他に THING (OBJECT), EVENT, STATE, PLACE, PATH, PROPERTY, AMOUNT などが挙げられますが、むろん可能な限り少ない数の基本的範疇を規定し、他はそれらから派生できる方が望ましいはずですし、基本概念範疇は人間言語に普遍的なものでありたいものです。ただし、以下で次第に修正されて行くように、これだけの基本概念ではとうてい幅広い概念構造を覆い尽くすことは不可能なことは容易に分かってまいります。

また、最後に反省するように、統語論の最新理論と並行するような意味論の精密な展開を望むのは無理でしょうし、ここのデータの意味分析の遂行には、必ずしも最新の統語論的分析を持ち出す必要はないかも知れません。

2. 3 Jackendoff (1983) (1987) では、認知心理学 (cognitive psychology) というより広い立場で意味論を扱い、それを Cognitive Se-

mantics と呼んでいます。従って、言語以外の認識・知的活動も当然問題になりますが、彼の最近の著書（1990）では、自然言語にほぼ専念して、語彙項目や統語構造の分析にこの認知意味論の成果を適用しよう目指していると言えらると思います。

3. 0 言語・非言語的認識に共通の基本的立場である cognitive semantics（「認知意味論」と訳しておきましょうか）からの主張を吟味してみましょう。

まず彼は、心的活動の理論に対する制約として、「概念構造の仮説」を立てます：言語、知覚、運動情報が共有する唯一の心的表象のレベルがある、と。むろん、この仮説には、論理的（そして、現在まで科学的）必然性はありませんが、一つの納得しやすい理想化とも、精神構造に関する統一的仮説ともみなせるのでしょう。Frege や Russell の時代では文法構造に関する知識が現在と比して（極度に）貧弱なものでありましたから、このように言語的情報に密接な関連性を主張できなかつたと、彼は主張します。彼の唱える概念構造は意味構造より高いレベルのもので、例えば語用論（pragmatics）とよく呼ばれる部門に属する規則によって、言語的意味は外的環境と結び付けられるとも考えられますし、あるいは意味構造自体が概念構造の部分集合を形成しているとも考えることもできます。（心理学では「知識表現」（Knowledge Representation）と称して、semantics と pragmatics とを統合する立場をとっている場合も多いようですが、彼もこれに近いと思われまふ。例えば、（1987 a）における非常に広い枠組みでの「概念意味論」に見られるように。）いずれにしても、ここでは心的表記は唯一のレベルと考えられ、すべての周辺情報はそれに写像されると見なしています。ここでは、言語の意味理論は他の知覚（e. g. 視覚）の理論と統合され、互いに理論構築に影響・制限などを与えることが期待されまふし、統一的抽象化を望む者にとっては歓迎すべき主張と言えまふ。

意味論の構築には、伝統的に、論理・哲学的にも言語学的にも、言葉の意味（内包）と指示物（外延）の区別ないし重点の置き方が問題です。先に見てきた Montague の理論においては、内包的処理が徹底して追求されていると見なされると思われますが、Jackendoff 自身も（精神）内的レベルの承認を当然として、脳のシステムと同一視はしないまでも、密接な関係を持って、情報処理の重要な部門（少なくとも一部）と見なし、それが言語の構造に反映されるものとします。

(1990) では、冒頭で E-language と I-language の区別を掲げ、前者が個人とは独立した客観的言語観に基づくものであるのに対し、後者は各人の内的存在としての言語であり、個人の内部で (internally) 処理される言語であり、彼の関わるのはあくまでも後者であり、概念についても、E-concepts に対する I-concepts への関心を強調しています。ただし、この点に関しましては、例えば、GPSG における model 理論に依存する（拡張 Montague 意味論と言うべき）意味論が、外面的客観性を重視して、I-concepts を軽視しているとは必ずしも言えないのではないのでしょうか。（E-concepts の客観性を利用して I-concepts を探ろうとしているとも言えるのではないのでしょうか）

3. 1 彼が認知の本質的面として範疇化の能力を重視し、言語理論ばかりか認知心理学の中心にこの範疇化の能力を据えています。言語における。この能力によって生み出された表現に彼は [TYPE] 概念を与え、それに属する具体的「もの」の持つ [TOKEN] 概念と対立させます。例えば、(1983) において（3章）、この範疇化判断の表記として、1階論理学のように [TYPE] 概念を述語とし、[TOKEN] 概念をその項 (argument) とするか、集合論的表記 $\text{arg1} \in \text{arg2}$ あたる 2項関数表記を採用し、この関数の第一項として [TOKEN] を、第二項として [TYPE] をとるようにすることが考えられますが、統語論との対応性を考慮すれば後者を選ぶ方を好まれるでしょう。その際の関数の英語の具体例は IS-AN-INSTANCE OF

(x, y) などが思い浮かびますが、関数といっても、論理・集合論でのように、それが写像するものは真理値ではなくて、彼の言う“a major ontological category”に属する概念構成要素と言うことになります。上記では、この場合の範疇として、[STATE TOKEN / TYPE] を導入して、“Leo is a dog”は：[STATE TOKEN ([THING TOKEN], [THING TYPE])] のような（一階）述語論理的表記か、IS-AN-INSTANCE OF ([Leo], [DOG]) のような集合論的表記のような、実例を提示しています。

3. 2 （私のごとき）論理的意味論の主張者にも容易に受け入れられ理解できるものに、彼の概念関数（function の訳は未だに「関数」しかありません）とその項（arguments の訳のつもりで、変数・定数などとは言わずに、変更・定項や一般には項と言うのが認められてきました）の構造の展開です。

彼の意味論では、彼自身その発展に大いに貢献した統語論における X-Bar Syntax と並列して X-Bar Semantics と称すべき範疇間の feature decomposition（「意味特徴への分解」とでも訳しましょうか）を導入して、I-concepts の説明を試んでいます。論理学における命題の定項・変項、述語、量子子などへの分析の代わりに、概念構造の基本的構成要素（成分）として「概念的品詞（conceptual parts of speech）」と称するものとして、Thing, Event, State, Action, Place, Path, Property, Amount などを立てています。そして、これらの品詞間の関係を結びつけるものとして、X-Bar syntax に対応する X-Bar semantics の規則を使用しようというのです。（概念品詞は上記のものより、相当増やさなければならなくなりそうですが、抽象的基礎概念としては可能な限り圧縮されたものを立てることを目指すべきでしょう）

X-Bar syntax において、 $XP \rightarrow \text{Spec} + X'$, $X' \rightarrow X + \text{Comp}$, $X \rightarrow [+ / - N, + / - V]$ のような一般式によって、より大きな成分（e. g. XP [X-Phrase]）が次々に構成成分（最終的には、素性（features）にまで）に分

解されていくように、概念範疇に対する形成規則として、

[Entity] → Event / Thing / Place . . .
→ Token / Type
→ F (〈Entity1, 〈Entity2, 〈Entity3〉〉〉)

のような展開式を立てています。第3行のように再帰 (recursive) を許す分解式ですから、可能な概念は (論理的には) 無限となります。さらに、概念は、

[PLACE] → [_{Place} PLACE-FUNCTION ([THING])]

のような展開式によって、Place 範疇に属する概念成分は場所 (place) 関数と範疇 THING に属する項をとるものだと分かります。例えば、“on the desk” という表現は机という対象を項として取る on という場所関数が、机を (項として) その上の場所領域に写像するものと考えられます。

このように、伝統的述語関数は大幅に拡張され、その項として名詞・形容詞以外に、概念領域の種々の要素を取れることにしたため、統語論と並行した、無理のない概念 (意味) 構造関数で言語表現を記述することが可能になると考えられます。冒頭で述べた、論理主義の拡張可能性の一例になり得ると言える所だと思えます。

概念構造の分析は、統語論上の差異にも拘らない意味上の同義性の分析を明解に示すことを可能にします。彼の例をそのまま挙げれば、〈enter〉と〈go into〉は、前者が後者の into の表す〈path 関数+Place 関数〉 (関数の関数) をその意味の中に取り込んでいるとして説明できます。この結果、enter 関数の第2項は Path でなくて Thing になり、統語論上は NP で表されることとなります。ここでも分かるように、統語論上の項と概念上の項と間の写像は1対1ではなくて、一般に多対多であることは明らかです。

3. 4 論理的分析の得意とする関数と項の表示は、まず関数の代表として動詞を、次いで名詞・形容詞を思い浮かべますが、(論理分析でも行われ

てはいますが)前置詞を関数としてそれに従う NP (名詞句) を項とする分析が, Jackendoff の意味分析では重要な役割を果たします。自動詞に対する (即ち, 目的語 (項) を取らない) 場合もここに含めます。(e. g. at home に対する home : 実用文法では, この場合は副詞 (句) とみなされますが, Jackendoff 流の方が論理主義の立場からはむしろ歓迎されるかも知れません)。項として NP をとる正常の前置詞の構文にも, 1 項のみに限らず 2 項以上の場合も当然含めます。(e. g. between NP1 and NP2 においては, NP1 と NP2 の 2 項をとる between ... and ... 関数)

3. 5 範疇化で重要な [TOKEN] と [TYPE] の区別において, 一つの [TOKEN] は内的思考世界 (彼の用語では, a projected-world) の (具体例としての) 「もの」は, 当然実世界の外延的「もの」(reference) と対応していると考えられますが, [TYPE] は反対に nonreferential であるという, 原理を彼は立てています。(1983) p. 94) これは, 彼が主張する非一指示的表現の自然言語における存在の主張に基づけば, 肯定できると思われま。

3. 6 電算機などでしばしば使用される default (既定値) の概念も役にたつことを強調しています。ある語の意味というものが, fuzzy の要素を持っていることが避けられないとすれば, 普通は default としてそれが持っている意味内容を持っていると解するのは不自然ではないと思われま。 “bachelor” と言っても, その必要条件の一である [-married] の特徴は結婚式の正確にどの時点で失われるのでしょうか。実際, (遺言) 裁判で問題になったことがあるそうです。(しばしば引用される Wittgenstein の ‘game’ の意味の不確定性の指摘は有名なことですが), とにかく, ある語 (句) の意味条件を満足させるだけの情報が明示的に与えられていない場合は, default values を満足していると仮定されるわけです。カテゴリー化は典型的意味を中心にした, いわゆる “prototype” 化の好例と見なせますから, 絶対的境界線の引けないのはむしろ当然と言えます。この規

定値の意味から（ほとんど）例外的に marginal な意味までの連続的値を意味（概念）というものは持っていると思えるべきでしょう。（多分、意味における有標／無標性の区別もここに導入可能でしょう）心理学という preference rules（「優先の規則」）が働く、というのもほぼ同等の記述になります。

（1985）で述べているように、markedness conventions による意味範疇と統語論的範疇の対応も理解しやすいものです。（e. g. Thing の unmarked realization として NP が、Place と Path のそれは PP, Property は AP, Event は S が挙げられるのはほとんど常識的とも言えるでしょう）同時に有標的に使用される場合（e. g. “out of place” (PP) が Property を表す）の指摘も重要だと思われます。語の意味の特定化に彼は [(1983) で] 3 の条件として、1. 必要条件 (“red” のそれとしては COLOR) 2. centrality 3. typicality を挙げています。2 は色の概念における段階的意味が挙げられ、3 には例えばリンゴの「赤さ」が適用されます。リンゴの赤さは黄色の物や緑のそれと較べての、典型的色の指定です。

3. 7 意味構造の分解可能性の主張は、論理主義の意味論学者達がしばしば主張するような意味公準 (meaning postulates) の主張と、語句の分解の各要素がより一般性を帯びた推論規則への接近と見なせば、矛盾しないものになりそうです。

4. 1 概念構造の考察から当然 GB 理論などで重要な主題的役割 (thematic θ -roles: 「 θ 役」と訳しておきます) の意味論に占める地位が明確になってきます。

言うまでもなく、 θ 理論は Chomsky 流の GB 理論の中での LF (logical form) において、大きな役割を果たすわけですが、重点としては統語論的面が強調されているように思われます。これに対して、Jackendoff (1990) などの最近の理論の中では、この面で大きな変化が見られます。即ち、基

礎的ポイントとして： θ の役割は統語論ではなくて、概念構造レベルの一つとして考えるべきだ、と彼は主張します。特定の θ 役（AgentとかThemeなど）は概念的 content を持った特定の構造的 position になり、 θ 標識付け（ θ -marking）は動詞の統語論的・概念的項の間の対応関係を付けることになります。

Jackendoff の意味論では、彼の当初の GB 理論に大筋では並行していますが、当初の要請である(1)各従属範疇化された NP (+主語) が概念構造の唯一の項に対応していること、(2)概念構造における各位置は正確に 1 の NP で表されるという条件を、弱めざるをえなくなっています。即ち、Chomsky 流の θ 基準 (θ -criterion) が守られない場合が生じます。それは、一つの NP が 2 つ以上の θ の役を持つ場合、反対に多くの NP が 1 つの θ 役を持つ場合があるからです。前者の例として、よく取り上げられる chase 動詞を取り上げますと、“X chase Y”において、(i). Y が動いていること、(ii). X が Y に向かって動いていること、(iii). X が Y を捕まえる（少なくとも Y の後を追っている）の 3 条件が必要になりますから、X は 2 の、Y は 3 の役目が考えられますが、どれを θ 役と称すべきでしょうか。

概念的関係としての θ 役は、名詞句 (NP) だけに限らず、形容詞と PRO などもその役を担えるということになります。(e. g. “Bill talked Harry into shutting up.”において、PRO shut up は目標 (goal) としての役を持っています) 上に述べた default の概念が格 (case) のような統語論的に適用されるものとするれば、default の θ 役と称するのは矛盾することになります。また、Chomsky 流に主語の位置の θ 役は通常考えないことにしています。(その主な理由は、統語論的に考えても、主語への θ 役の付与は動詞が直接行うのではなく、その上の VP 全体によって行うものだからでしょう)

4. 2 先に、基本的な概念範疇として、「空間 (場所)」を表す範疇をまず述べましたが、むしろそれ以外に多くの (基本的) 範疇が考えられます

し、その必要にも迫られることは疑いありません。しかし、その数が多数になればなるほど、枚挙的性格が強調され、一般性が失われると憂慮されます。エレガンスを減らしてしまう恐れです。しかし、これを救う道もいくつか考えられるのです。

Jackendoff が (1983) で試みているのは、空間の基礎概念を樹立しておいて、非一空間的概念 (例えば、事象 [EVENTS] とか状態 [STATES] など) をその空間概念から主に引き出した、非常に限定された原則に従って説明することです。これは、認知心理学的にも受け入れやすいでしょう。言語の未発達の状況において、五官で直接 (具体的に) 接しられる空間的範疇をまず確立し、他の非感覚的範疇をこれにならって (言語的に) 表現するというのは容易なことと推定されます。別の表現を使えば、種々の分野が同じ構造で表されると言うより、本質的に同構造を持っていると言った方がよいかも知れません。

時の表現は 1 次元の仮空間 (“pseudospace”) に対応され、よく知られている時の流れ (time-line) を構成している訳です。英語において、場所の表現に使用される前置詞 + 名詞句は多くの場合、時の表現にも並列的に利用可能です。

4. 3 しかし、GO, STAY, BE, ORIENT, EXT, CAUSE などが基本概念関数と空間的次元ばかりでなく、広い範囲の他の意味分野に応用されることを認めても、もっと多くの概念関数を導入しなければ説明の不可能な多くの意味表現が残されていることは明かです。

このために、6 章以後において、様態や配置 (CONFIG[uration]) の意味表現、起動 (INCH[ogative]) ・交換表現の関数などが導入され、次いで種々の Action Tier と称する関数が Actor と Patient などの意味関係の説明に導入されます。(Theme Tier が Theme / Goal, Source / Theme を説明するための概念的役割を果たすのと対をなします) その代表的例として、AFF(affect) や原因ないし使役的表現に欠かせない CAUSE 関数な

どが挙げられるでしょうし、これらの thematic / action tiers の関数に、
+ / u / - などの superscripts をつけて (e. g. CS⁺ のように) 成功・中
立・不成功などをより細かく表記する実例も挙げています。

もちろん、彼も主張しているように、原始的関数をただ付け加えて安易
な説明を試みるのではなく、全体的に結びつきのある概念構造の再構築を
目指して、一層緊密な構造を持った意味概念の枠組みを目指すべきです
し、その成功は十分満足感を与えてくれるはずです。さらに、彼が指摘し
ているように、確立された概念クラスが統語論的対応を持てば、概念と統
語論的構造との写像関係が窺えるわけです。例として挙げられているの
は、接触を表す動詞が典型的に他動詞であり、付着の動詞は前置詞 to と共
に現れ、構成を表す動詞は out of / from を Source に into を Goal に使
用する前置詞と共に現れるというようなものです。むろん例外はありますが、
意味論対統語論の写像関係に窺える規則性は、統語論対音韻論におけ
る写像関係 (例、過去時制と複数の英語の屈折範疇) と似ていると言え
ると思われます。

一般論の展開には、一言語に特有なものから、さらに言語一般へ普遍性
の探求へと、視野を広めることも当然なされなくてはならないでしょう。
いくつかの言語に跨った研究や比較研究の重要性も、意味論的分野におい
てより強いのではないのでしょうか。

5. 1 Jackendoff が「対応の問題」と称しているのは、彼が樹立しよう
としている概念構造と統語論との間の関係の理論付けともいうべきもので
しょう。その中には語彙理論 (対応関係) も当然ふくまれないはなりま
せん。

むろん、なんども述べたように、その対応規則は可能な限り単純である
ことが望ましく、普遍的な概念構造から各言語に固有な統語規則に写像す
るものでなければなりません。Montague 文法に窺えたような厳密な構成

可能性 (strict compositionality) も当然この単純性への目標にそったものであり、Chomsky 流の θ 基準もこの線に沿ったものと言えるでしょう。

理想的には概念関係が直接、一様に統語関係に反映されることで、それは格文法などで部分的とは言え試みられたと言えます。しかし、表現された概念の項と統語的位置との間に多くの不对応が見られることは、認めなくてはなりません。例えば、open という動詞は、自動詞の場合は Theme として主語が、他動詞の場合は目的語になります。標準理論的には、表層・深層構造の区別を立てて、深層構造においては同じ位置を占めると言えるかも知れません。(例えば、生成意味論では Theme は常に深層では主語とされます)

概念構造と統語論的位置の不一致の説明には、上記のように(昔風に変形などの操作を導入して)統語論の説明がしばしば行われてきていますが、語彙論的な説明として、open の場合では、2 の open の形態を立て、それぞれが異なる統語論的枠組みに対応すると主張することも可能です。この際の複雑化を減少させるために、語彙規則 (a lexical rule) を導入してこの二組の統語論的枠組みを関係づけます。(主語に立つ場合の open は動詞の非一使役の形態で、目的語の位置では使役の形態の方が使われている、と言うわけです)

5. 2 Jackendoff は「対応規則 (correspondence rules)」を最大に利用して、この問題を解こうとします。そこでは、語彙論の枠外の規則を用いて、統語論的枠組みと概念的構造との間の写像関係を明確化しようとしています。(open については、Agent があれば、それが主語の位置を占め、Theme がある場合は主語の位置が既に埋まっていれば目的語として現れ、空いている場合は主語となる)。一般的に言って、そのような linking rules は「主題の階層 (thematic hierachy)」に訴えて、概念的役割の統語論的実現を決定すると言えます。

ここでの Jackendoff の主張で、興味を引き賛成したくなるのは、彼が「少々古くさいかも知れないが、項の移動を最小にとどめる統語理論 (a syntactic theory — where what you see is what you get) に結局なってしまう」と告白していることです (p. 159)。

6. Jackendoff は (1990) の冒頭で、Chomsky (1957) の「統語論と意味論のを統括し、両者の接点を探る」という目的に沿った意味論の追求を目標に掲げ、それが生成統語論と基本的に両立するものであるために、内的意味論 (I-semantics) すなわち言語によって表される概念の人間の理解を解明する心的表記の基本構造とも言うべき「思考のシンタックス」を目指すのだと述べました。

そして、I-semantics の第 1 の原理は、生成文法と同様に、語彙的・文的概念が構成的構造 (compositional structure) を持つべきであるという要請に立つべきだとします。この本の全体を貫いて、そのような構成的構造が追求され発見・形式化されていると言えらると思われます。言語表現 (特に、その基本的単位としての語彙) の分解可能性を肯定しなければ、このような分析は不可能であると言ってよいでしょう。

種々の語 (句) の持つ曖昧性 (fuzziness) も語彙の分解可能性の主張を拒否する根拠とはならず、統語論と概念構造の基本的相関を考慮する際は、discrete and digital な概念構造の面に一義的注目をするのは、論理主義者の目からも、肯定できることです。

統語論と意味論の対応の理論は、いやもっと押し進めれば意味論の (現状の) 問題自体が、統語論の最新の理論に直接影響を受ける段階に達しているとは言い難いが故に、GB 理論とか LFG の f-structure のような精巧な主張に関わりがないと言えらる面が多いと思われます。その点での、Jackendoff の議論の進め方は従い易いものです。彼の主眼にしているこの書での分析に必要な統語論としては、Aspects-model (あるいは、[拡

大] 標準理論など)でも十分可能ではないでしょうか。

他方、意味論 (Jackendoff の称する「認知意味論」) の追求は純粹に概念的な基本概念 (例、基本的空間関数、主題 (θ) の階層、action tiers など) や基本要素の結合法則 (例、関数一項の構造、修飾関係、束縛など) は統語論とは独立的な可能な概念構造を明確にしてきました。それらの統語論への影響ないしは修正を考慮する必要も当然起こってくるはずですが、同時に統語と概念構造を繋ぐ「対応規則の部門 (the correspondence rule component)」の樹立の必要性を彼は主張しています。対応規則と称するものは一般的には: 「統語構造 S が概念構造 C に対応するという」形式をとるものですが、統語・意味構造に属させた可能な限り独立基本概念の両者を結ぶものと考えられます。独立の両領域をまたぐ規則をこの部門に属させようというのです。これによって、統語論の自律性の問題を対応部門に引き渡して、統語規則と対応規則の相対的關係で考慮しようというのです。

このようにして、語彙論の多くは対応部門に帰せられ、結合規則 (linking-theory) が統語論と概念構造の多—対—多の写像関係を扱うこととなります。NP-V-NP という単純な統語構造が多数の主題関係 (θ -relations) に対応規則によって関係づけられます。それだけ統語部門は単純になります。

Jackendoff 自身認めているように、(1990) で扱われている問題以外に意味論的に説明し難い問題は多数あることは明らかです。彼はその理論が (語彙を始めとする) 学習規則への貢献を期待しています。その主要な面が対応規則の学習可能性にあることは認めてもよいと思われます。「これこれの構造がある言語 L でこれこれの概念を表現するのに使われる」と子供がどのようにして学習するのでしょうか。この種の原理の形式的性質のより深い理解への努力と成果は大きな期待をいだかせるものです。

Jackendoff は既に (1976) において、Pjaget を引用して、論理的思考は

思考の初源的基礎にあるのではなく、諸段階の最終的發展の結果に位置づけるべきであると主張して、形式的論理主義を否定し、生物—心理学的構図の展開の研究の重要性を強調しています。(私流の論理主義に従えば)これは論理主義の否定につながるものでは決してないと思われるのです。生物学(心理学)的な現実世界の把握のための実験・観察によって得られた事実を認識することにより、概念構造と称せられるものが、具体的 token 的性質から次第に抽象的 type 的のものへ、さらに包括的構造的な範疇 categories の確立の記述にと進展していく過程の理解につながる、という主張に言い換えられると考えます。この面での意味論的研究には大きな興味をそそられないではられません。(1991年6月20日)

references

(limited to Jackendoff's works referred to in the text):

Jackendoff, R.

(1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press

(1975) "On Belief-Contexts," *Linguistic Inquiry* 6, pp. 53-93

(1976) "On Explanatory Semantic Representations,"

Linguistic Inquiry 7, pp. 89-150

(1983) *Semantics and Cognition*, MIT Press

(1985a) "Believing and Intending," *Linguistic Inquiry* 16, 445-460

(1985b) "Multiple Subcategorization and the θ -criterion,"

Natural Language & Linguistic Theory 3, pp. 271-295

(1987a) *Consciousness and the Computational Mind*, MIT Press

(1987b) "The Status of Thematic Relations in Linguistic Theory,"

Linguistic Inquiry 18, pp. 369-411

(1990) *Semantic Structures*, MIT Press